

動詞統語論と生物言語学・進化言語学

藤田 耕司

京都大学

要旨

語がレキシコンで形成されるのかシンタクスで形成されるのかは、理論言語学上の大きな争点の1つとなっている。本稿では、分裂VP構造を採用する動詞分析を例にとり、生物言語学・進化言語学の観点からは後者（反語彙主義）が方法論的により優れたものであることを論じた。

キーワード

言語の進化と発達、進化的妥当性、強いミニマリストの命題、反語彙主義、分裂VP構造

1. はじめに

生物言語学(biolinguistics)・進化言語学(evolutionary linguistics)は、現生人類に特異的な生物学的形質である言語能力の設計・発達・進化の研究を通して人間性の本質に迫ろうとする企てである。ヒトをヒトたらしめているのはこの言語能力にほかならず、これをよく理解することが、人間とは何かという根源的な問いへの手がかりとなる。このような大きなスケールの学際的研究と伝統的な言語研究は、その関係が希薄であるかのような印象を抱く読者もいるかもしれない。事実は正反対であり、両者が緊密な連携をとることで双方に新しい知見がもたらされ、両分野の研究がともに進展していく。

本稿ではこういった連携の1例として、これまでの言語研究でも盛んに行われてきた動詞の分析に注目する。動詞はいわば文の中核的要素として、その特性が文全体の統語的・意味的特性を左右する。本稿では、動詞は語彙的に固定された存在ではなく、統語的に生成され、その意味は構造的に定義されるという立場を採る。いわば個々の動詞がすでに「構文」としての特性を備えていることになる。より一般的には、文法のアーキテクチャとしてレキシコン（語彙部門）をシンタクス（統語演算部門）とは独立したモジュールとして認めるべきか否かの、語彙主義と反語彙主義の間の理論的

争点に関して、後者を支持する考察を行う。¹

2. 「進化的妥当性」とレキシコン

日常的な理解では、文法とは語を組み合わせて句や文をつくり、できあがった言語表現を音声と意味の両面において適切に解釈する仕組みである。この語はレキシコンに蓄えられており、また語の組み合わせを行うのがシンタクスであるなら、シンタクスとレキシコンはともに言語能力の不可欠のコンポーネント（モジュール）となる。生成文法に代表される現代の理論言語学においてもこのような言語観は踏襲されており、これら2部門を区別した上で、その線引きをどう行うのが理論全体としてより優れたものになるのかを巡って議論が繰り返されてきた。Chomsky(1970)の「語彙論者仮説」はこの点に関するもっとも重要な提案の1つであった。² 同じことは進化研究や発達研究についてもいえ、シンタクスの進化・発達とレキシコンの進化・発達をそれぞれ独立した現象とすることが慣例化している。

その一方で、特に動詞に関しては、その統語的特性を重視してこれを統語的に生成する立場も古くからあり、生成意味論が採用した語彙分解(lexical decomposition)の手法はよく知られている。³ またこれに類似した分裂VP(動詞句)の考え方が現在のミニマリスト・プログラム(MP)においても積極的に採用されている点は、特に興味深い。

MPは、言語が音声と意味を繋ぐ上での最小の仕組みしか備えていない、最適化されたシステムであるとする作業仮説、「強いミニマリストの命題 (Strong Minimalist

¹ **語彙主義(Lexicalism)・反語彙主義(Anti-lexicalism)** 語はシンタクスとは別の文法モジュールであるレキシコンでつくり、シンタクスは各語のもつ語彙情報にしたがって統語構造を組み上げるとする立場が語彙主義、語も文と同様にシンタクスでつくり、その基本的意味構造(概念構造)は統語構造の中に実現されるとする立場が反語彙主義である。前者はおもに語彙意味論や概念意味論の研究者が支持する見方であり、後者はレキシコンを完全に撤廃する「分散形態論」(Marantz 1997)のほか、程度の差はあるが、語のもつ統語的性質を重視するほかの統語論研究にも共通してうかがえる見方である。

² **語彙論者仮説(Lexicalist Hypothesis)** refuse に対する refusal などの派生名詞(derived nominal)の形成について、これを変形部門ではなく、同じく統語部門内の範疇部門で行う立場。これにより、レキシコンのサイズを大きくすることなく変形操作の力を制限することができ、また範疇横断的な句構造スキーマとして X_{bar}理論をたてることが可能となった。誤解している研究者が非常に多いが、派生名詞をレキシコン内で名詞として記載しておく語彙主義とはまったく異なる。

³ **生成意味論(generative semantics)** 1960年代に、当時のチョムスキーの標準理論を批判する形で提案された生成文法理論で、統語構造と論理・意味構造を同一のものとした。語彙分解や深層構造の廃止など、現在再評価すべき提案もあったが、意味をすべて構造内に表示しようとしたために無理が生じ、理論としては破綻した。形式と意味を分けないという基本姿勢は現在の認知言語学を受け継がれている。

Thesis, SMT) 」を採用しており、これは(1)のように示される。

$$(1) \quad \text{Interfaces} + \text{Merge} = \text{Language} \quad (\text{Chomsky 2010: 52})$$

Mergeは2つの統語体を組み合わせて1つの集合を定義するという、最大に簡潔化された回帰的統語演算操作である。⁴

$$(2) \quad \text{Merge}(\alpha, \beta) \rightarrow \{\alpha, \beta\}$$

SMTは、インターフェイス（音声解釈にかかわる感覚・運動(S-M)インターフェイスおよび意味解釈にかかわる概念・意図(C-I)インターフェイス）を除けば、このMergeのみが言語に必要であり、おそらくは普遍文法(UG)の内実として実在するということが述べており、それ以外の言語の特性はすべて、自然物一般に作用する物理的法則（最小演算則など、MPでいう「第三要因」）から生じることが期待されている。⁵ この点で、MPの言語観・UG観は非常に豊かで複雑なモジュール文法を想定していた過去の生成文法理論（1980年代の原理・パラメータのアプローチ）とは決定的に異なっている。⁶

このような“Merge-only”に基づくUG最小化の試みは、生物言語学上・進化言語学にとっても重要な意味をもつ。UGはヒト種固有かつ言語固有の生物学的遺伝情報であるから、その成立経緯も生物進化に則った自然な説明がなされなければならない。UGが複雑であればあるほど、そのような説明は困難であり、簡潔であるほど容易となる。

⁴ **回帰(recursion)** ある操作の出力が再度同じ操作の入力となる性質。Mergeを回帰的に適用することで、原理的には無限の長さの文を生成することができる。実際の言語使用においては、記憶の制限など、Merge自体の特性とは別の要因が働くため、用いられる文の長さには限りがあり、例えば that 節の埋め込みも数回が限度とされる。しばしば誤解があるが、回帰は補文構造の形成だけに関わるのではなく、以下で見る vP 構造をはじめ、統語構造のいたるところに遍在する。

⁵ **第三要因(the third factor)** 言語を含め、生物学的形質の設計を決定する要因には、(i)遺伝的要因（言語の場合、UG）、(ii)環境的要因（言語の場合、第一次言語資料）、(iii)自然法則（言語に特定のなものはない）、の3つがある（Chomsky 2005）。MPでは、これまで言語固有と考えられてきたUGを極力、自然法則に基づいてより原理的に導出することでUGの最小化がはかられている。

⁶ **原理・パラメータのアプローチ(Principles and Parameters approach)** UGが普遍的な一般原理とその個別言語ごとの実動様式を調整するパラメータから構成されるとした考え方(Chomsky 1981)。これにより、母語獲得とはパラメータ値の設定であり、また言語の変異・変化はパラメータ値の変異・変化であるという見方が確立し、言語獲得研究や類型論を含めた対照・比較言語研究の分野が大きく進展した。その一方で、過度に複雑で言語固有の原理を想定した結果、その生物学的・進化的説明が困難となったため、現在では根本的な見直しが求められている。

「進化的妥当性」を充足する文法理論を構築する可能性が高くなるのである。⁷ そして同じことは語彙能力の進化・発達研究についてもいえる。

人間の語彙能力はほかの動物のそれらしきものとは質的にも量的にも大きく異なり、極めて生産的かつ創造的であって、時空を超越した象徴作用をもつ。このヒト固有の語彙能力は統語演算能力とは無関係に独立して進化したのだろうか、それとも統語演算能力の進化がもたらした帰結なのであろうか。統語演算能力は言語の必須の構成要因でありいずれその起源・進化が説明されねばならない以上、これに依拠して語彙能力の進化も説明できるほうがより経済的で優れた説明となり、進化的妥当性に到達しやすくなる。これが、生物言語学・進化言語学的に見て、反語彙主義が方法論的に優位である最大の理由である。

3. vP分析の生物言語学・進化言語学上の意義

動詞の統語的分析法は、生成意味論以降の生成文法の展開においてもさまざまな形で採用されてきており、Hale and Keyser(1993)ほかの項構造に関する一連の研究やLarson(1988)以来の分裂VP構造、特にMPにおけるvP(=little VP)分析がある。⁸ また、生成意味論に対峙してJackendoff(1972)が提唱した解釈意味論の流れをくむ概念意味論(Jackendoff(1990)ほか)や語彙意味論(Levin and Rappaport Hovav(1995)ほか)も、同様の考え方を(語彙)概念構造((lexical) conceptual structure, (L)CS)という疑似統語的表示レベルに置き換えているに過ぎない点は特に留意すべきである。

語の特性の説明上、語を不可分の原子単位ではなく、より小さな基本素子から組み

⁷ 進化的妥当性(evolutionary adequacy) Fujita (2007, 2009)などの用語で、言語の個体発生(母語獲得)を説明する理論が説明的妥当性(explanatory adequacy)を満たすというのに対し、その系統発生(起源・進化)を説明する理論は進化的妥当性を満たすという。環境要因だけでは個体発生の説明はできないという「言語獲得の論理的問題」「プラトンの問題」に対し、系統発生にはそれと同質だがより根深い「言語進化の論理的問題」「ダーウィンの問題」(Fujita (2002)ほか)が存在するという認識に基づく目標設定である。

⁸ 分裂VP(split VP) 1つの動詞が統語的には複数のV主要部から構成される複合体をなすという考え方で、基本構造は(i)である。

(i) [vP Subj v [VP V Obj]]

他動詞の場合、主語 Subj と目的語 Obj はそれぞれ上位 v と下位 V の項であって、1つの語彙的動詞が同時に主語・目的語をとっているのではない。これは主語しかとらない非能格動詞(ii)、目的語しかとらない非対格動詞(iii)の場合も同じであって、動詞は常にこのような統語構造の中で実現され、レキシコンにあらかじめ記載されているものではないことになる。

(ii) [vP Subj v [VP V]]

(iii) [vP v [VP V Obj]]

このように考えることで、他動性交替をはじめこれまでレキシコンの問題とされがちであった動詞をめぐるさまざまな現象を、統語的に統一して説明することが可能になる。藤田・松本(2005)を参照。

上げられる複合体として見るほうが好都合であるとする点においては、統語的語彙論も概念意味論・語彙意味論も立場は同じである。その中であって、語の生成を行うのは統語演算操作Mergeとは異なるものであるとするのが語彙主義であり、それはMergeにほかならず、Mergeが人間言語の唯一の生成エンジンであるとするのが反語彙主義である。後者がSMTに沿って進化的妥当性を追求する上で、まず検討すべきデフォルト仮説となることはいうまでもない。

ここでvP構造の典型例として、二重目的語(DO)動詞give(3)と前置詞つき与格目的語(DatO)動詞give(4)の対を比較してみよう。研究者により仔細は異なるが、ここでは説明を簡略にするために表記法を単純化している。

- (3) a. Mary gave John a book.
 b. [vP [Mary] [gave] [John] [a book]]
 c. [vP Mary v [vP John V a book]]
 d. [x CAUSE [y HAVE z]]
- (4) a. Mary gave a book to John.
 b. [vP [Mary] [gave] [a book] [to John]]
 c. [vP Mary v [vP a book V to John]]
 d. [x CAUSE [z GO-TO y]]

いずれも(b)は旧来型の平坦なVP構造であり、(c)がvPによる分裂VP、(d)はそれぞれの(L)CSである。分裂VPにおけるvが(L)CSにおけるCAUSEに、Vが HAVEとGOにそれぞれ対応すると考えると、統語構造と(L)CSは同型であり、別個に(L)CSを設定する必要がなくなる。つまり(L)CSは統語構造から読み取られる情報となり、この統語構造を形成する統語演算は同時に(L)CSの形成も行っていることになる。

この統語演算と意味概念解釈との対応関係が、C-Iインターフェイスの根幹であると考えよう。インターフェイスもMergeと並んで言語能力の中核をなすが、その起源・進化も生物言語学・進化言語学では自然な説明がなされるべきである。(L)CSが独立した表示レベルとして存在するなら、その起源・進化もMergeとは独立してなされ、しかもそれがどのようにして統語構造と対応を結ぶようになったのか(リンキングの問題)も別個に説明されなければならないが、概念・語彙意味論側からはそのような提案は見当たらないのが現状である。比べて、分裂VP仮説によれば、C-Iインターフ

エイスはMergeの拡張的進化によって成立したことになり、何ら特別な説明は要求されない。Mergeの進化に関しては、筆者自身によるもの(Fujita (2009)、藤田 (2012, 印刷中)ほか)を含め、比較認知行動学や認知考古学の知見に基づく提案がすでになされており、その検証を進める意味でも、まず統語演算からC-Iへの拡張という可能性を探るのが妥当である。

Culicover and Jackendoff(2005)は、(3b)-(4b)に類似の平坦VPのほうが分裂VPよりもシンプルであると主張しているが、この主張はおもに次の2点で不当なものである。まず、彼らが念頭におく「シンプルさ」とは結果的に生じる統語構造に対して定義されるものであり、MPという演算操作自体のシンプルさとは無関係である。実際、2項Mergeという「もっともシンプルな」操作だけでどのように「複雑な」構造も構築できるという点が重要なのであり、このような操作を仮定しないC&Jの枠組みとの比較はそもそも無意味である。当然ながら、平坦VPをMergeによって生成する場合には、より複雑な多項型のMergeが必要となるだろう。さらに上記のリンキング問題についても、C&Jの枠組みは何ら解答を与えない。C-Iインターフェイスの進化を考えず、ただ任意のリンキング規則を仮定するだけでは生物言語学・進化言語学的に不十分なのである。

4. 進化と発達

vP分析やこれを包摂する反語彙主義は、比較的突発的に起きたと推定される言語進化の実相を捉える上で優れて有効である。現生人類が共有する言語能力ないしUGは、およそ5万年前から10万年前のいずれかの段階でホモ・サピエンスの中に発生し、その少数集団が出アフリカを果たした結果であるとされる。これに先行する「原型言語」から、真の人間言語への跳躍的推移を可能にし、人類の想像力と創造性を爆発的に開花させたのがMergeの出現であり、これによって言語は語と文とを問わず無限の生成能力を得たと考えることができる。⁹

MPではさらに、言語発達と言語進化の近似化も推進されているが(Lorenzo and Longa 2003)、反語彙主義は幼児の語彙獲得についても重要な示唆を行う。その1例は先に見たDO動詞とDatO動詞に関するものであり、幼児は前者をより早く獲得するこ

⁹ 原型言語(protolanguage) 人間における言語とほかの動物におけるその不在の圧倒的な不連続さを埋めるために提案される、言語の進化上の前駆体的能力。およそ 200 万年前以降のホモ・エレクトスの系統のいずれかで発生し、萌芽的なシンタクスとレキシコンを備えていたとされる。

とが従来から指摘されている。これらの動詞句構造がそれぞれ(5a,b)で表されるものとする ((3)-(4)参照)。

- (5) a. [vP DP1 CAUSE [vP DP2 HAVE DP3]]
b. [vP DP1 CAUSE [vP DP3 GO [to DP2]]]

するとこれらの動詞を獲得するには、まずそれを構成する抽象述語を獲得し、Mergeで組み合わせることができなければならず、これらの獲得に関する時系列的相関関係が予想される。Viau(2006)のコーパス研究によると、それぞれの平均獲得年齢は次のとおりであり、この相関関係を証明している。

- (6) a. DO give (2;1.6) > DatO give (2;4.9)
b. CAUSE (2;0.4) > HAVE (2;0.7) > GO (2;4.0)

ここでは、DO giveの獲得に先行してまずその構成要因であるCAUSEとHAVEが獲得され、次にGOが獲得されると初めてDatO giveの獲得も可能になるという順序がきれいに示されている。このような事実の説明は反語彙主義に立たなければ不可能であり、ただ動詞を個別に丸ごと記憶するとか、構文的フレームとして覚えるとかいった従来のおざなりな見方が的外れであることがわかる。より具体的には、幼児の語彙獲得、特に動詞獲得に関連して次の重要な2点を指摘できる。

- (7) a. Mergeは1語文の産出においてすでに作動している。
b. 「動詞の島」は存在しない。¹⁰

語と語を組み合わせる2語文を産出する以前に、1つの語がすでにMergeの適用を要請している(7a)。また獲得された動詞にはすでにその生成にかかわる統語演算とそれによる項構造・概念構造の構築がともなっており、その統語演算自体は個々の動詞に個

¹⁰ **動詞の島 (verb island)** 母語獲得の最初期における幼児の動詞の知識は、それぞれが項目別のものであり、ほかの動詞との関連性を何らもたない「孤島」状態であるとする、Tomasello(1992)らの考え方。本文で述べたとおりこれは誤った見方であり、Tomaselloと同じ反生得論に立つ Ninio (2006)によってもすでに批判されている。ただし、このことは逆に極端な生得論を支持することにもならない点に注意。実際、反語彙主義は、動詞という範疇やその項構造、概念構造が生得的ではなく、すべて Mergeによって後天的に獲得されるものであることを主張している。また Merge 自体は MP では UG に組み込まれた生得的メカニズムとされるが、(7a)だけではその生得性の証拠にはならない。

別のものではありえない(7b)。

5. 語彙分解の検証

分裂VP分析の基盤をなす語彙分解の妥当性は、当時の生成意味論自体への評価とは独立して検証されなければならない。生成意味論とは異なって、分裂VPは動詞の項構造・概念構造が統語演算から帰結すると主張するだけであり、構造には表示されない多数の意味情報が存在していることを否定するものではない。また言語の全体像をとらえるには、構造由来ではない意味情報こそが語彙意味論的には重要なのであって、(L)CSのような疑似統語構造を用いた研究は結局、統語論の一部にすぎない。

ここで語彙分解に対してなされた批判を振り返り、それがむしろ分裂VP構造を支持するものであることを確認しよう。

- (8) a. [Mary CAUSED [the cat DIE]]
- b. Mary killed the cat.
- c. Mary caused the cat to die.

(8b)の語彙的動詞killは(8a)に示される抽象述語CAUSEとDIE（DIEはさらにBECOME, NOT, ALIVEに分解されるがここでは省略）が、「述語上昇規則」（MPではこれもMergeの1例である）によって結合した結果として実現される。killの語彙意味は構造(8a)にすでに表示されており、これがC-Iインターフェイスの成立問題にとって重要な意味をもつことは上で述べた。当時の論争では念頭に置かれることのなかったこれらの生物言語学・進化言語学上の問題意識を新たに加えることで、語彙分解を正当に再評価することが可能になる。

生成意味論ではさらに、文(8c)も同じく(8a)から派生されると提案され、この点を巡って語彙分解への批判が噴出した。Fodor(1970)は(8b, c)が次の点で意味的に異なることを指摘し、両者を同一の構造から派生させることができないことを示した。(8b, c)はいずれも上位事象（使役事象）と下位事象（被使役事象）の2つを内包する使役表現であるものの、(8b)におけるそれらは(8c)と異なって同時内に起きる単一的な事象しか表さず、また(8b)の被使役者the catには(8c)と違って意図的動作主性を認めることができない。

- (9) a. Mary killed the cat, and she/*it did so suddenly.
 b. Mary caused the cat to die, and she/it did so suddenly.
 c. *Mary killed the cat today by shooting it yesterday.
 d. Mary caused the cat to die today by shooting it yesterday.
 e. *Mary killed the cat by PRO(=the cat) chasing the mouse.
 f. Mary caused the cat to die by PRO(=the cat) chasing the mouse.

被使役事象を単独で代用表現で示すことができるのは(8c)だけであり(cf. (9a, b))、また(8c)のみ、使役事象と被使役事象が時間的に離れたものであって構わない(cf. (9c, d))。さらに(8c)のthe catのみが、ネズミを追う動作主として解釈可能である(cf. (9e, f))。

このような相違は、killとcause to dieの間にだけ観察されるものではなく、一般に「語彙的動詞」と「統語的構文」の間に成り立つ体系的なものであり、例えば日本語の「着せる」と「着させる」のような「語彙的使役動詞」と「統語的使役複合動詞」も同様の対比を示す。

- (10) a. 花子が太郎に服を着せた。
 b. 花子が太郎に服を着させた。
 c. *花子が太郎に服を着せ、明子もそうした。(=明子も服を着た)
 d. 花子が太郎に服を着させ、明子もそうした。(同上)
 e. *花子が太郎にわざと変な服を着せた。(わざと=太郎の意志)
 f. 花子が太郎にわざと変な服を着させた。(同上)
 g. *花子が太郎に自分の服を着せた。(自分=太郎)
 h. 花子が太郎に自分の服を着させた。(同上)

「服を着る」という下位事象が独立して代用表現の先行詞となるのは「着させる」の場合だけであり(cf. (10c, d))、被使役者「太郎」に意図性を認めることができるのもこの場合だけである(cf. (10e, f))。さらに、この場合のみ「太郎」が下位事象における主語として働き、再帰代名詞「自分」の先行詞になりえる(cf. (10g, h))。

しかし以上のような観察は、例えば(8b, c)とともに(8a)に結びつけることが誤りであることを示しているだけであって、(8b)のみが(8a)から派生し、(8c)は別の統語構造をもつことへの反証にはならない。ましてや、両者を「語彙的」と「統語的」に区別す

る理由にはまったくなくなっていない。反語彙主義に基づけば、(8c)のcause、dieもそれぞれが分裂VPによって実現されるものであり、(8c)の構造は概略(11b)のようになり、(8b)の構造(11a)とはまったく異なる。(dieは非対格動詞として分析されることが多いが、ここでは非能格の構造で示してある。)

- (11) a. [vP Mary v [VP the cat V]]
 b. [vP Mary v [VP V [TP the cat T=to [vP (the cat) v [VP V]]]]]

被使役事象にあたる範疇が(11a)では裸のVPであるのに対し、(11b)では(不定詞標識toがあることから明らかのように) TPまで投射しており、その内部にdieに該当するvP投射が独立して存在する。このことから、(11b)の下位事象は独立した時制解釈をもつこと、ならびにthe catはvPないしTPの主語として動作主解釈をもつことがただちに読み取れる。これは日本語の(10a, b)についてもまったく同様である。

(8b, c)や(10a, b)は確かに同じものではないが、その違いは両者がともに統語的に生成され、結果として異なる統語構造をもつことから自然に帰着するのである。ただ両者を語彙的と統語的とに分け、生成部門が異なるといっただけでは何の説明にもなっていない。(「語彙的複合動詞」の存在を主張する影山(1996)らが証拠としてほかにあげているデータも、藤田・松本(2005)ですでに指摘したように、実際にはすべて統語的に説明される。)

6. まとめ

本稿ではMP/SMTに基づいて生物言語学・進化言語学研究を推進する上で、語はシンタクスで生成されるとする反語彙主義の立場が方法論的により優れたものであることを、動詞の統語的分析を例にとって述べた。今日の理論言語学は単に言語研究というのみならず、言語能力の解明を通じた人間科学の実践であり、ただ言語現象の記述と説明だけに没頭しているわけにはいかない。とりわけ生成文法は、言語が人類普遍かつ固有の生物学的資質であるという立場を一貫して採ってきており、その研究はもはや生物学や人類学をはじめとする関連諸分野を無視してはまったく成立しない。それゆえに生成文法は生物言語学・進化言語学の中核領域となりえるのであるが、従来の理論言語学が取り組んできた諸問題をこのような広い視野から検討し直すことが、これからの「理論言語学の可能性」を拓くことにもつながるのである。

参考文献

- Chomsky, Noam (1970) “Remarks on nominalization.” In Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, pp.184-221. Waltham, MA: Ginn.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (2005) “Three factors in language design,” *Linguistic Inquiry* 36: 1-22.
- Chomsky, Noam (2010) “Some simple evo devo theses: how true might they be for language?” In Richard K. Larson *et al.* (eds.), *The Evolution of Human Language: Biolinguistic Perspectives*, pp.45-62. Cambridge: Cambridge University Press.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford: Oxford University Press.
- Fodor, Jerry A. (1970) “Three reasons for not deriving ‘kill’ from ‘cause to die’,” *Linguistic Inquiry* 1: 429-438.
- Fujita, Koji (2002) “Review: Lyle Jenkins, *Biolinguistics: Exploring the Biology of Language*,” *Gengo Kenkyu* 121: 165-178.
- Fujita, Koji (2007) “Facing the logical problem of language evolution,” *English Linguistics* 24: 78-108.
- Fujita, Koji (2009) “A prospect for evolutionary adequacy: Merge and the evolution and development of human language,” *Biolinguistics* 3: 128-153.
- 藤田耕司 (2012)「統語演算能力と言語能力の進化」藤田耕司・岡ノ谷一夫(編)『進化言語学の構築—新しい人間科学を目指して』ひつじ書房 pp.55-75.
- 藤田耕司 (印刷中)「生成文法から進化言語学へ—生成文法の新たな企て」池内正幸・郷路拓也(編)『生成言語研究の現在』ひつじ書房
- 藤田耕司・松本マズミ (2005)『語彙範疇(I) 動詞』研究社
- Hale, Kenneth & Samuel Jay Keyser (1993) “On argument structure and the lexical expressions of syntactic relations.” In Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.), *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, pp.53-109. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structure*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版

- Larson, Richard K. (1988) "On the double object construction," *Linguistic Inquiry* 19: 335-391.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Lorenzo, Guillermo and Víctor M. Longa (2003) "Minimizing the genes for grammar: the Minimalist Program as a biological framework for the study of language," *Lingua* 113: 643-657.
- Marantz, Alec (1997) "No escape from syntax: don't try morphological analysis in the privacy of your own lexicon," *UPenn Working Papers in Linguistics* 4: 201-225.
- Ninio, Anat (2006) *Language and the Learning Curve: A New Theory of Syntactic Development*, Oxford: Oxford University Press.
- Tomasello, Michael (1992) *First Verbs: A Case Study of Early Grammatical Development*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Viau, Joshua (2006) "Give = CAUSE + HAVE/GO: evidence for early semantic decomposition of dative verbs in English child corpora," *Boston University Conference on Language Development* 30: 665-676.